

『轍印深深』

—ある満洲国軍官の日記に現れた恋文について—

李

青

はじめに

『轍印深深』ある満洲国軍官の日記は、2011年に吉林省政治協商文史資料委員会・吉林市档案局より内部書籍として公表された資料である。合計四巻に分かれている。日記は文化大革命時に反革命分子や漢奸に対する家宅捜査時に、“戦利品”として持ち出された。反動的な文章とされ、焼却処分が決められた日記だということである。しかし、直前の混乱に紛れ、ある有識者によって密かに持ち出され、命がけで大切に隠し持っていた。今日満洲国を研究している私たちにとっては、これより貴重な資料がないほど、価値の高い物だと言えよう。

日記の編集者の一人である東北師範大学曲曉範教授の話では、懸命に日記を隠し持っていた有識者の手で、文革収束後に吉林市档案館に寄付されたという。満洲国時代の読み物が封印されていた一時期、日記はほこりをかぶりながら档案館の書庫で眠っていた。出版に当たり、日記の著者は傀儡国家—満洲国の軍官であるため、その世界観は反動的だとされ、公表するに不適切だという様々な政治的なクレームがつき、日記の公表はしばらく滞っていた。編纂当初も政治的な判断によって不都合な部分がカットされたのであるが、曲曉範教授などの強い働きかけにより、日記のすべてを復元し四年間かけて整理編纂した。この日記の公表によって、かつて満洲国で生活していた一軍人の公的な暮らし、プライベートな一側面をそのまま観察することができ、為政者にもっとも近い立場にある軍官の歴史的な証言が得られることになる。満洲国の実態を把握するには、非常に貴重かつ重要だと言わざるを得ないだろう。

満洲国時代の日記資料は『鄭孝胥日記』（全五冊 中華書局 1993年）が有名である。鄭孝胥は満洲国の初代総理大臣を務めた人物である。日記は1882年23歳から亡くなる79歳の1939年までである。清末から、民国時代、さらに満洲国時代の個人の見聞や思想的なもの及び生活の数々を記した。歴史人物のため、日記については日中の研究者によってすでに実りのある研究成果が出ている。しかし、普通の民間人の日記は戦火で散逸するものが多く、ほとんど残されていない。本論で取り上げる日記は実に珍しい。研究対象とする研究者はまだ少ない。先行研究には筆者が書いた資料解題「ある「満洲国」軍官の日記『轍印深深』」（『文藝論叢』大谷大学文藝学会 2014年10月 第83号）があるだけである。

本論の日記は1944年の分を散逸したほかは、1938年1月1日から1945年12月31日までであり、日記の著者の心象風景、人生の歩みがきめ細かく記録されている。日記の内容は多岐に亘る。軍旅生活の細かい記録は当時の満洲国軍の研究に大変貴重なものになる。日記の中に私的な人間関係や日常の出来事なども書かれており、当時の若い軍人たちの趣味、娯楽、嗜好などを垣間見ることができ、そこから反射された社会の動きや世相を感じ取ることができる。日記が記録していた期間は、満洲国がすでに建国され、満洲国内の様々な様子以外に、中国国内の抗日戦争や広く世界的な第二次世界大戦の戦況まで反映される箇所が多々ある。著者が中心に組織した「抗日組織」についての記述はリアルかつ大胆であり、メンバーの一部の名前や活動状況および個人的な過激な心理描写などがかなりの紙幅を占めている。この部分を証拠にして検挙された場合には、著者自身のほか日記に書かれた友人も巻き込まれ、上司など周囲の人々は連座される。処刑される恐怖を感じずにはいられないほどの内容である。

日記は一個人の生活記録、心の歩みであるため、生活の細々とした内容も多く含まれている。とりわけ、日記の始まる1938年は著者が独身であり、恋愛対象とした女性への憧れ、一知識人軍官の女性観、恋愛観など、彼と婚約者との手紙のやりとりのすべてが日記に残してある。

本論では日記に現れた大量な恋文を分析の対象にする。当時のエリート階級の若者たちの恋愛観、結婚観は如何なるものなのか、彼らを取り巻く社会環境、家庭環境はどのようなものなのか、30年代から40年代までの婚姻風習

を含め、総合的に検証したい。二人が交換した手紙は膨大な量であり、筆者は1941年9月12日に施明儒が書き始めた第一通の手紙（第二巻 64頁）から、婚約直後の1942年5月26日の18通目（第二巻 349頁）までの恋文を題材にする。恋文の文字表現は大変美しく、恋に陥っている気持ちの表現は詩歌で現したり、相手を思慕する気持ちを故事に託したりするような描写が愛しい。さらに叙情的な恋文は文学的な価値も高いと言える。

一 著者、軍旅生活と異性、女性観、婚姻観

日記の著者について吉林省政治協商文史資料委員会・吉林市檔案局は次のように紹介している。

著者施明儒は1913年10月19日、吉林省梨樹県生まれ。1935年（22歳—以下の（ ）はすべて筆者による注）梨樹県から敦化県に出向き、満洲国軍の通信兵に入隊した。1938年（25歳）奉天（瀋陽）の軍官学校に合格、1941年（28歳）に卒業してから吉林市独立通信隊副隊長になる。1942年（29歳）江上軍に転勤する⁽¹⁾。

上記の紹介の他、日記に婚約者の両親に宛てた手紙に自己紹介があった（1941.9.22二巻75頁）。そこから家庭事情について、もう少し詳しいことが分かる。著者には兄弟がいない。父親はもうすぐ60歳であり、母親が65歳である。数年前に母親が眼疾病で失明したものの、両親ともに健在である。家庭には固定資産もなく、けっして裕福ではないとの記述があった。これから婚約する可能性のある女性の家庭に対して、自分の家庭環境について、正直に紹介する必要があるながら、財産について言うならば、慎重かつ過小評価し、遠慮した口調で述べるのが無難のようである。多子多福が孝行の前提である中国の旧社会では、著者の施明儒の家庭は極めて稀なようである。日記から読み取れる著者の学識、学歴、普段の買い物、金遣い、及び父親が汽車に乗って頻繁に郷里と息子の駐屯地を行き来する様子から堅実な郷紳の出自であろうと推測される。

(1) テキスト 第一巻 1頁。

施明儒は1943年4月25日に30歳にして、婚約から一年後に、李雲儒と結婚した。李雲儒は本名李少儒であり、婚約中に婚約者の施明儒によって「少」を「雲」に改められ、「李雲儒」と名付けるようになった。年齢については、1942年1月6日付けの李雲儒が施明儒宛てた手紙（1942.1.9第二巻 218-219頁）では、結納金をめぐり、父親ともめる場面に触れたところに「これは生まれて21年来、初めて両親と口論した」とあった。ここから推定すると、結婚した翌年に22歳だと分かる。30歳の新郎に22歳の新婦は今日の時代ならば、結婚適齢であり、ごく普通のカップルであろうが、40年代の中国では、二人とも超晩婚だと言わざるを得ない。

日記の編集部は恋文について、「作者が妻の李雲儒と恋愛から結婚まで甘い愛情に満ちた暖かい言葉、苦悶、悲しみおよび感情的な葛藤を通じて、著者の青年期における性格の特色、成長の道のりがわかり、青年たちの恋愛観と処世態度が現れている⁽²⁾」と評価している。

日記の著者施明儒は22歳の年に、故郷を離れ、満洲国軍の通信兵に入隊した。それまでの経歴や学歴は不明である。しかし、日記の文面から見る限りでは、著者は文学的な教養が高く、古典的な詩歌などに精通し、日記の大部分は文語体で書かれていた。格式の高い教育を受けていたことが伺える。なお、日記の中に著者の父親や婚約者李雲儒の自筆の手紙が掲載されており、いずれも文語体の文章であり、紋切り型の文面から比較的高い教育レベルを有することが分かる。李雲儒の父が施明儒に宛てた手紙の中に「女学校を卒業した後、康德7（1941）年に吉林市公署地政科に就職した」（1942.1.6第二巻316頁）との説明から、娘の李雲儒は政府部署に就職出来るくらいの才媛であることが分かる。それぞれの家庭環境を見ても、子供に教育を受けさせる余裕があるため、裕福階層のはずである。

軍旅生活が始まった施明儒は日々厳しい訓練を課せられていることが日記の頁ごとからにじみ出ている。日常に戻れば、22歳の男盛りである著者の異性に対する思いは如何なるものなのだろうか。日記の中に現れた痕跡を拾いながら検証してみたい。

1938年9月4日の日記はお気に入りの「淑嫻」という女性のいる飲食店に

(2) テキスト 第一巻 2頁。

行った記述は興味深い。内容的に売春があるような店のように感じられるが、日記に著者との間に特に疚しい記述が全くない。単調な軍旅生活であるが故に、決まったガールフレンドもなく、行きつけの店の女性に著者が好意を寄せていたようだ。「本日は一人で外出し、淑嫻に会いに行く。彼女は朝食を準備している。この寂しく退屈な時間を潰すために、僕はビールにパイナップルの缶詰を注文してから、ゆっくり飲みはじめた。たまた、彼女が仕事を終えてからしゃべるのを待っていた。やっと、仕事を一段落し、彼女が僕としゃべり出しところ、数人のうるさい客が現れ、彼女は無理矢理に呼び出された。僕はひとりぼっちで本当に退屈だった。このとき、僕に声をかけて寄ってくる他の女性がいたが、話すのも嫌だった。(中略) 遠慮もせず僕の隣に座るなり、交際を求め、僕と交際したい、遊びたい、結婚したいと言い、いきなり僕の頭を抱きキスし始めた。誠にみっともなく、淫乱極まりない！僕は彼女のつきまといと侮辱に耐えきれず、食べ終わらずに慌てて逃げ出した」(1938.9.4 第一巻83-84頁)との記述がある。話したい意中の淑嫻のいる店の性質が分かる一節であろう。厳しい軍事訓練の後に、身体を癒やそうと思いい、風俗に走る若い兵士が多いだろうか。しかし、淑嫻の存在は著者にとっては、どうも格別のようなものである。11月27日の日記にこのような一節がある。観劇後に「意外にも二度目の淑嫻探しになる。(中略) もうすぐ彼女に近づくことができると思うと、嬉しくなり、まっすぐに店に入った。座ると、すぐ淑嫻を指名した。あいにく、一月前に辞職して、実家に帰ったと告げられた。大いに失望した！悶々と一人で座り、適当に酒を飲んでから店を出た」(1938.11.27 第一巻93頁)。淑嫻という女性の辞職はさぞかし施明儒にとってショックだったに違いない。異性の淑嫻の手料理、慰めの言葉などは、厳しい軍旅生活を送っている施明儒にとっては、心の支えと癒やしになっているのではないかと、想像される。この僅かな楽しみと心のふれ合いは淑嫻の辞職によって、断ち切られてしまった。施明儒は淑嫻に好感を寄せており、いなくなった寂しさは隠しきれなかったのであろう。幻な淡い恋が芽生えていたことが感じられる。

1939年3月26日の日記に「芝」と呼ばれている女性に触れていた。心の中でずっと好意を寄せていた女性と思われる。

芝が結婚することを知ってから、最初は本当に失望した。理性的に言うならば、彼女のことを本当に良かったなと喜んでいる。過去のことを振り返って考えると、彼女の人格を尊敬し、別かれて二年間の間に彼女のことをずっと愛していた。彼女の不幸と不遇をときどき思い出している。彼女は生活のために、社会の暗闇に投げ出され、悪魔に包囲されていた暗黒な環境のなかで、屈辱を凌ぎながらもがいていた。彼女の将来に考えられない恐怖が待ち構えている……故に僕は始終彼女のことを心配し、彼女を憂慮していた。現在は信用のできる男性と結婚できることは、幸運なことだろう。彼女の強い意志に背かないように、彼女の夫にも彼女のような綺麗な人格と信義を持ってもらいたい。僕は心から祈り、祝福したい。彼女と夫はいつまでも幸せであるように……

芝に関する内容はこの日の日記のほとんどを占めている。恋心を抱いていた芝という女性に深い同情と祝福を送っていた。三十年代に中国の女性の地位はまだ低く、勉学、婚姻の面においては、様々な理不尽な制限が課せられていた。女性にとっての幸せは優しい男性に巡り会え、良い結婚ができるぐらいしかなかったのである。不遇だった芝は幸せな結婚をしたことが分かったと、施明儒の嬉しさ、心の安堵が日記に溢れている。社会の女性に対する差別、圧迫を目の当たりにして、憤懣やるかたない気持ちを顕わにする施明儒の女性観は進歩的である。

普段女性との出会いの機会がない軍旅生活では、婚姻はお見合いに頼るしかない。友人の紹介で一回しか会っていない静婉の場合は長く続かなかった。日記(1941.11.23第一巻162-163頁)に静婉と彼女の母親が著者に宛てた手紙が二通が載っている。静婉の手紙は田舎で僅かしか勉強できなかったとは思えないほど、美辞麗句が並べられている。他人が代筆していたのではないかと、施明儒は疑うほどだった。さらにこの女性の母親の手紙を見ると、「婦人は翁姑の家訓を守るべき。このような文通を直ちにやめるべき。もし結婚の意が固まれば、先に進めるべき……」(1940.7.5第一巻170-171頁)と、娘との手紙による交流を拒み、ひたすらに結婚を迫る内容である。しかし、施明儒にとってのパートナーは単なる男女の結合のみでない。彼は日記の中では、こう述べている。「結婚というのは、王嬙⁽³⁾、西子⁽⁴⁾のような人を選ぶばかりで

なければ、さらに家庭の奴隷を買うことでもない。性的な問題を解消するだけのことではない」(1940.6.11 第一巻164頁)と。施明儒の結婚観から、彼はこの問題において、まったく譲歩する気持ちはないことが分かる。あくまでも、彼が求めている女性像は内面的に交流ができ、心を通わせることではないだろうか。このお見合いは特に意にかなった相手ではなかったため、継続せずに終わったのである。

二 李少(雲) 儒との出会い

1941年9月6日の日記に友人童萬惠の紹介により、「李少儒」という女性の名前を初めて登場する。初日は都合がつかずに会えなかったものの、翌日に友人の計らいでお見合いを実現できた。施明儒は初対面の李少儒についてこう描写している。「彼女は軽くおしゃれをし、質素な服に身を包まれ、化粧を施していない。雅やかで礼儀正しい。堂々としている。派手な贅沢な様子も見られず、穏やかに談笑をしている。ただ皮膚がやや濃いのが、艶めかしさは失っていない。物怖じもせず、如何にも育ちの良さが現れている。身体は少し細いが、病的ではない」と。日記に女性の容貌についてこんなに詳しく描写することは、これまでに会った女性についてはなかった。初対面は好印象だったことが分かる。女性を観察する重点は単なる容貌ばかりでなく、「雅やかで礼儀正しい。堂々としている。派手な贅沢な様子も見られず、穏やかに談笑をしている」という相手の内面から発する知的な部分に気を引かれたにちがいない。

三十年代の中国東北地方は「男女授受不親」(男女は夫婦以外の接触を禁ずる)の因習はまだそのまま残っており、自由恋愛は社会の道徳に反する行為として往々として認められていない。知識のある男女も例外ではない。結婚するまで媒酌人の付き添いで数回面会する程度である。相手を理解するには、紹介人からエピソードを聞くか、知識人の場合は文通するのが一般的だった。

9月10日の日記では、紹介人の童萬惠から施明儒が李少儒についてのエピソード

(3) 王嬙は中国の四大美人の一人で王昭君(紀元前52年-15年)のことである。名は嬙であり、字は昭君である。貂蟬、西施、楊玉環と並び、中国古代の四大美人とされる。

(4) 西子は西施のことである。春秋戦国時代の生まれ。貂蟬、王昭君、楊玉環と並び、中国古代の四大美人とされる。西施で女性を例えると、美しいことの代名詞とされる。

ソードを紹介されている。「彼女は某署で勤務していたときに、給料を家に収める生活費以外にほとんど貯金にまわした。その結果、貯蓄額は数百元に達した。自分で洋服を多数購入した」と。当時李少儒は吉林市公署に務めており、給料は80元だった(1942.1.15 第二巻227頁)。数百元の貯金があるのは堅実だと言えるだろう。このエピソードについて施明儒は「ここから見れば、この女性は思慮深く、人に頼らず自立する性格を持っている。自立している女性の中では、自分の稼いだ金銭で贅沢三昧する人をよく見かけるが、こんなにも質素で貯金に励む人はめったに見えない」と好感を寄せている。

施明儒は李少儒との初対面後、いつものように軍隊生活を送っている。李少儒は郷里に戻った。二人は結婚にたどり着くまで少し時間がかかり、文通という形で互いに理解を深め、愛し合う仲になった。二人の文通の量は膨大な量に上り、ここでは施明儒が出した一通目から婚約成立後までのやりとりを絞り、当時の知識青年の恋愛観、風俗習慣などを検証してみたい。

三 恋文から見られる恋愛観、世界観

1941年9月10日に施明儒が初めて李少儒に手紙を出した。著者は二人の付き合いを記念するために、ほとんどのやりとりを日記に残した。ここから婚約の1942年1月2日まで約四ヶ月付き合い、交わした手紙は36通に上っている。二人は初対面から一年七ヶ月して、1943年4月25日に結婚した。

二人の文通は李少儒の母親および紹介人の了承の下で始められたことが第一通目の手紙で分かる(1941.9.10 第二巻65頁)。デートすることなどままならぬ時代だったから、文通するのも親や媒酌人に断らずには難しかった。

では、施明儒が李少儒に宛てた第一通目の手紙を見てみたい。彼は自分の結婚観について以下のように述べている。(1941.9.10 第二巻64頁)

何故結婚するだろう？僕は少し知識のある青年男女ならばこの問題について皆一定の理解があるだろうと思う。僕の考えでは、結婚は単なる子供を生み、家庭内の飲食や家事をこなすだけのことではない。また父母に仕えて自己満足するためでもない。もしも、これらのための結婚ならば、使用人に来てもらったほうがよっぽど楽であり、法律的な責任を負う必要もなくなるだろう。(中略)結婚というのは両性間の正常化を

保つことができ、道徳的な墮落を防ぐことができる。臆病の相手を勇気づける。退廃状態から元気を回復し、両性にとっては生命が新しく蘇る。彼または彼女に新しい力を与え、精神を奮い立てて、理想的な大仕事ができる。一人の小さな力から、共同体の偉大な力に変わることができる。これは性別の違う二人が灌漑した生命の源である。これこそ両性の結合、つまり結婚における真の精神、真の幸福である。

さらに李少儒に対する第一印象の良さを手紙で相手に素直に伝えている。「軽くおしゃれをし、質素な服に身を包まれ、化粧を施していないで人と面会することのできる女性は、高い教養がなければ、こんな美德を示されることができないだろう。この一点だけから女史の品格は人一倍高いことを証明している」(1941.9.10 第二巻64頁)と書いている。

それに対して、李少儒の返信は率直で大胆である。彼女は施明儒の婚姻観に賛成しながら、自分の結婚や恋愛について自由結婚、まず恋愛することを異に唱えた。「意気投合とは何だろう？(中略)結婚後の恋愛は婚前より確かなものと信じる。二人は互いに理解し合い、力を合わせて協力し、不屈な精神を持って、暗黒を突き破り、前進すれば、どんなに高山が目の前の道を遮っていても、幸せな道にたどり着くだろう」(1941.9.20 第二巻72頁)と言っている。さらに独自の男性批判を堂々と述べていた。

彼女の堅い意志に対して、施明儒は思わず手紙を何度も読む程だった。

文通し始めた頃は、お互いに名前呼び合っていた。施明儒は女性のことを「少儒女史」と呼び、李少儒は施明儒のことを字の「匡亜先生」と呼んでいた。互いに尊敬しあい、対等で手紙を交わしていることは、まだ男子上位のこの時代にして、新鮮で開明的に感じられずにはいられなかった。

施明儒は新しい時代に西洋文明の新風に触れていた青年として、「女子には才能なしが徳であり」のような陳腐な考え方が見られず、結婚相手の条件は容貌よりも寧ろ見識のある女性を好んだ。30歳近い独身男性に周囲からの縁談が絶えなかった。ある美しい17歳の少女との縁談を持ち込まれた。彼は内面を「上調子で放蕩の習慣があり、学識の程度が低い。僕は付き合いがない」と突き放したことを紹介したことがある(1941.9.11 第二巻66頁)。

李少儒と文通するようになってから、女性の読み物を意図的に購入するこ

とを紹介している。「未来の妻に取っておこう」と日本語原文の『西洋史』、『日本の歴史』、『現勢地理通論』、『女子生理衛生学』、『新語新知識』などを購入した(1941.9.27 第二巻77頁)。女性のことをもう少し理解を深めるために、本代にして15元もの大金を惜しまず、『現代家庭』、『結婚社会学』、『人生観集粹』、『中国女性の文学生活』などを購入している。結婚生活への憧れ、もっと女性を理解したい姿勢が見られる。

一方、李少儒は施明儒に次のように自己紹介している。「父は45歳、退職したばかり。今後は商人に転じる予定。母は39歳。家に利発な5歳の弟がいる。春に嫁いだけばかりの18歳の妹がいる。まずまずの暮らしをしている。自身は社会人になって、数年たった」(1941.10.2 第二巻120頁)。「まずまず」の暮らしというのは、裕福な暮らしと理解して良いだろう。識字率の低い三十年代の東北地方の田舎では、女子にも教育を受けさせることは、家庭的に裕福なうえ、両親が女子を軽視する考えを持たない開明的な持ち主だと言える。

施明儒の家庭に「固定資産もなく、けっして裕福ではない」ことに対して、李少儒は少しも意に介さず、「一人の志の青年は父兄の遺産に頼って生活してはいけない。あなた様のような独立性も持っておられる方はこの世の中に何人いるのだろうか。“独立した精神を持って、他人に頼らずに”仕事をなさることは、将来において、きっと前途有望に違わない」(1941.10.2 第二巻120頁)と財産のことよりも施明儒の独立性の強いことを評価した。

一方、施明儒自身は理想の女性についてこだわりを持っていたようである。李少儒に宛てた三回目の手紙では(1941.10.4 第二巻121頁)、「ただ時代の知識だけが女性をモダンにする武器である。封建制度の奴隷にならず、社会に人類の一人の女性として認めてもらいたいならば、束縛と圧迫から抜け出さなければならぬ。前の世紀のように、女性を家庭の奴隷と男性の玩具と見なしたことは、女性にとっては、屈辱的なことばかりでなく、男性にも屈辱的なことでもある」と述べているが、これらは女性解放や男女平等の言論として受け止められる。

李少儒とのお見合いは実は友人のしつこい好意に背くことができずに、友人をがっかりさせないために、いい加減な気持ちでお見合いしたのだったが、李少儒と三回文通した後に心情を吐露したのである。日記では、お見合い話が30件にも上り、実際にあった女性は18人いたという。いずれも成功できず、

周りの友人に条件が高すぎるとの苦情がでるほどであった。彼の目に映った女性はどうのようなものなのか、彼が求めている条件とは、何なのか、1941年10月4日の日記（第二巻123頁）を引用する。

私が要望しているのは、女性が守るべき本分である。残念ながら現代的女性は、物質的な虚栄心に理性を奪われた。みだらな欲望に魂が腐食された。彼女たちは婚姻の精神を理解することができない。人生の意義を理解することはもっとできない。彼女たちは最低である。これは僕が彼女たちを軽蔑しているのではなく、女性を侮辱し漫罵しているのではない。この一年来30数人の女性を見て得られた真実の感想である。僕は理想の女性に出会えなければ、むしろ独身に徹した方がましだと思っていた。（中略）本来ならば、慧兄の“親切”をごまかすつもりで会った李少儒は、たとえすべてが満足するとは言えないにしても、意外にも満足が得られた。まだ二回しか文通していないが、彼女こそ“理想の伴侶”と予感している。

これまで会ってきた女性と比較すると、李少儒こそが理想の人であり、彼女から勇気、女性としての知恵、学識、遠大な理想を抱くところに大きな魅力を感じたのだ。

四 恋文から見られる東北地方の婚礼風習

施明儒と李少儒のお見合いは当然ながら結婚を前提にしたものである。施明儒は第三通目の手紙（1941.10.4 第二巻121頁）ではじめて「早くても来年の春に結婚式を挙げる」ことに触れている。さらに「名義上の関係を明白化するために、まず婚約の儀礼を行う」ことを提案した。

李少儒の返信（1941.10.18 第二巻134頁）から婚約にあたり準備しなければならない品は一家の主の父親から紹介人宛に送ることが分かる。これらの物は女性サイドから男性サイドに提出するのが普通であろう。

李少儒の手紙では、婚約するには四色の「⁽⁵⁾圧婚布」を用意しなければなら

(5) 「圧婚布」は昔に北中国の農村に広く流布した習慣である。婚約後に女性サイドから男性

ないと書いてある。四色とは、つまり赤、青、白、黒である。結婚用の「圧婚布」について李少儒は具体的に指示している。「実は、赤や黒の布はあまり使用に適していないが、(それでもしきたりに従って) 買わなければならない。この二色の布を衣料用に変更させて頂きたい。できれば、赤または深紅が好ましい。目下、木綿の生地はなかなか手に入らない。どなたかに頼んで何メートル購入しておけば、使うときに便利だろう。青は“士林布⁽⁶⁾”の生地をお願いする。上記の生地はいずれも10尺(3尺=1メートル)をお願いする」と。

中国では、結婚に際して、木綿の生地で布団から衣服までを新調する習慣があり、男性側が生地を用意し、女性側は用意された生地で結婚に使われる寝具や服などを新調するのが一般的である。

古いしきたりの前では、若い二人は田舎の繁文縟礼に反感を感じながら、親や社会の前では、ある程度譲歩しなければならない無力さも感じられる節がある。施明儒は李少儒の伝統的な「圧婚布」を用意する手紙に対して、「流布してきた習俗は容易に打破することはできない。今日のしきたりをどう見ても、古代のやり方を残しつつ現代的な要素を取り入れるのが、かえって両性(男女)を結合する意義を軽視しているのではないか。逆に我々はこの習俗に反するようなやり方を取ると、礼儀と道徳の反逆者だと唾棄されてしまうだろう」(1941.10.18 第二巻135頁)と述べている。さらに次の同年10月30日に再び李少儒に結納について相談し合った。二人は伝統のしきたりを遵守し、両家の親の面目を保つべきだという意見は一致しながら、形式張ったことを抵抗を感じている。施明儒は「五千年の寿命が続いてきた“超礼儀と道徳”はいまだにこの半封建的な社会で生きている。完全に死んでいない。潜在的に生きているからこそ、当然ながら礼儀と道徳の反逆者になれない。まして、親の命に逆らえず、周囲の怒りを買えずである。故に、我々は敷衍するしかない」(1941.10.30 第二巻143頁)と世間体の前では、伝統と戦う難しさ

サイドに対して、結婚準備用に使われる布を数疋から何十疋購入してもらう。地方によっては、色まで決められることがある。「圧婚布」の「圧」は魔除け、福を呼ぶ意味合いも含まれている。

(6) 士林布というのは生地の細やかな青色の木綿生地のことである。「士林」は士大夫、知識人の意味がある。知識人たちが服を作るときにこの生地を愛用するところから、「士林布」と名付けられている。



図1 東北農村によくある幔帳
(戸張)



図2 あまり見られなくなった旧式の
幔帳 (戸張)

(図1, 図2 Baidu <http://www.baidu.com> 图片大全 東北婚礼・幔帳)

を訴えていた。

11月に入ってから婚約に向けて、二人の手紙のやりとりはより具体的になり、結納の内容を巡って、親や媒酌人の介入によって、複雑化してきた。まだまだ「父母の言いつけと仲人の取り持ち」が先行する時代では、男女二人の気持ちよりも女性の実家は男性の家側に金銭的な要求が高い現実があった。李少儒は父親が仲人に過大な条件を出した手紙に悩み、その苦悩を施明儒に打ち明けた。「利益を重視し娘を軽視する冷酷な父親」(1941.1.6 第二巻148頁)と思っている施明儒は、父親と違った娘の自分への理解、愛情に溢れていることに感動し、一層好感をもつようになった。

婚約に漕ぎ着けたのは四ヶ月後の1942年1月2日、吉林省の蛟河⁽⁷⁾で執り行われた。この間に女性側の父親がより多くの結納金を獲得するために何度もめめ事を起こし、婚約破棄の危機までであった。若い男女の深い信頼関係、共通の理想から芽生えつつある愛情をもって、すべてを乗り越えて、新たな一歩を踏み出した。

婚約後に、結婚に向けて様々な準備が本格的に始まる。婚約後に李少儒が施明儒に宛てた手紙に結婚用の寝具について以下のようなことが書いてある(1942.1.9 第二巻219頁)。

(7) 蛟河は吉林省の東部に位置し、李少儒の故郷である。婚約時に婚約者の施明儒の勤務する吉林市から451*。離れている。

また白い木綿の生地は高いだろうから、戸張（図1、図2はイメージ）一つ作れるくらいの材料を買って頂ければ良い。他はこちらがすでに準備できた。なお、五字と七字の旧体詩、または新体詩を賜りたい。私の分も替わりに作って頂きたい。詩を枕に刺繍する。二首お願いしたい。なお、新婚用の戸張の一部ができた。上にどんな文字を刺繍したらいいですか。お好きな文字を四文字を送ってくれば幸いだ。

昔の東北農村に新婚の部屋に戸張が作られていた。装飾のための他、ベットを覆い被し、新婚夫婦のプライバシーの空間を確保し、夏には蚊帳にもなる。色は縁起の良い赤が主流であるが、白を使って、赤の刺繍を施すこともある。李少儒が白の生地を選んだ理由は彼女の故郷の風習であると考えられ



図3 旧式の結婚時に使われる枕カバー

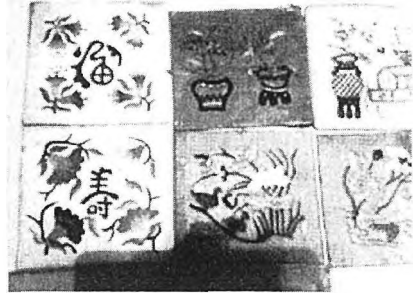


図4 旧式の結婚時に使われる枕カバー

(図3、図4 Baidu <http://www.baidu.com> 图片大全 東北婚礼・刺繍枕套)

るほか、彼女のセンスも考えられる。いずれも清楚な感じである。

新婚時には枕も綺麗に刺繍を施し、おしゃれな縁起の良い柄や吉祥文字を入れるのが一般的である。図3、図4はそれである。しかし、新時代の二人はユニークなことを考え、枕に詩を入れようと考えている。

1月10日の日記（1942.1.10 第二巻221-222頁）では、恋人に頼まれた詩を作成し、披露している。

戸張には「儿女英雄」（素晴らしい男女の意）の文字を刺繍することに決めた。旧体詩については、八首、新体詩を三首作り、新婦になる李少儒に選択してもらったことになった。

それぞれ一首ずつ紹介しておこう。

依初识郎时 两心印如一；含羞送红豆，为郎种相思。（五言絶句）

（日本語訳：あなたは初めて僕と会ったときに、心と心を通じ合い、恥ずかしいながら、小豆〈相愛の象徴〉を送り、僕のために愛情を送る。）

春宵倚枕对郎谈，儒兄儒妹是前缘；婚后恋与婚前恋，问郎到底哪边甜。

（七言絶句）

（日本語訳：春の夜に枕にもたれながら愛する人と話し、儒兄と儒妹は前世で縁があり、愛する人に婚前恋愛と婚後恋愛がどちらが楽しいのかと、尋ねる。）

吾爱！

原你永久住在我底爱里，

我倾注满心的爱酒情酿，沉醉着你。

吾爱！你只在我底爱里，你只受我的沉醉！

我心灵的身体，伴你做着温柔的欢睡。

（日本語訳：愛する人よ！僕の愛にいつまでもいてほしい。僕はすべての愛の酒を注ぎ、あなたを酔わせる。愛する人よ！僕の愛にだけいてほしい。僕の酒だけで酔いしれて欲しい。僕の身も心も君に伴って、甘い眠りにつく。）

年明けの1942年のやりとりは二人は婚約したこともあり、互いの呼び方に変化が現れている。「儒妹妹」と「明儒兄様」と呼び合っていた。二人の合意で、李少儒の名前にある「少」を「雲」に改め、「李雲儒」になった（1942.1.27 第二巻243頁）。毎回の通信内容は互いの気持ちを確かめ、理想を語る他に、結婚に関する打ち合わせや買い物の確認がより細かくなってきた。絹の値段と変わらないくらい、木綿の生地は値段が高いとか、布団の生地や綿などの用意ができたとか、お互いに送るプレゼントなどのようなやりとりから見て、結婚へ期待と幸せがにじみ出ている。

1月25日の日記（1942.1.25 第二巻239頁）に「儒妹妹」に送る荷物のリストがあった。特に本の内容とタイトルから新しい時代の息吹が感じられる。

冬の帽子1つ、三角スカーフ1枚、ストール1枚、ベストとパンティ各1

枚、手袋4セット、ハンカチ6枚。以下は書物。『健美常識』、『生育宝庫』、『歴代女子詩選』、『女性衛生常識』、『現代家庭』、『円満夫妻』、『全中国及び南洋諸国写真集』、『婦女奇観』8枚、『上海ハニト』1組、などがあった。

上記の小包の価値は50元だということであるが、役所勤めの李少儒の80元の給料からすれば、高価な品にちがいない。一軍官の給料からしても、決して安い物ではないだろう。それでも、愛する人におしゃれしてもらえばかりではなく、教養を付けてもらうために、幅広い内容の本を選択したと思う。

二人の文通の中に愛情を表現する詩を良く引用し、二人の愛情の純粋さが現れており、文学的に読んでも奥ゆかしさが感じられる。

離れ離れになっている彼を思うあまり、不眠に陥っている李雲儒に戯けながら良い「薬」を処方すると言う。この処方された薬はなんと王維⁽⁸⁾の有名な『相思』だった(1942.1.21 第二巻237頁)。

红豆生南国，春来发几枝？愿君多采撷，此物最相思。

(紅豆南国に生ず、春来たつて幾枝を発く 願わくは君多く采撷せよ、此物最も相思わしむ)

また恋人に静養し、よく寝るようにすることを勧めるために、金昌緒⁽⁹⁾の《春怨》を引用した。

打起黄莺儿，莫教枝上啼。啼时惊妾梦，不得到辽西！

(黄鶯兒を打起して、枝上に啼しむることなかれ 啼時は妾が夢を驚ろかし 遼西に到ることを得ざらしむ)

古典的な詩に秘められた故事を借り、面白くユーモアたっぷりに本意を伝えることも格式の高い愛情表現であろう。

満洲国の軍官であった施明儒が結婚するには、婚姻願を提出し、婚約者及びその家族に対して軍部の調査機関の審査を受けなければならなかった。愛

(8) 王維(699年-759年説と701年-761年説がある)は盛唐時代を代表する詩人である。

(9) 金昌緒(生卒年不詳)は唐時代の詩人である。

し合う二人に故意に難癖をつけるような出来事がおこった。1942年3月20日の日記には、「洋鬼の参謀長〈日本人長官だと思われる〉は僕を密室に呼び、あなたの婚約者にまだ若干の疑問点がある。……もう一度よく考え直して、調べなさい！」(293頁)と言われた。「打ちのめされ、頭がくらくらしていた。いろいろ弁解したが、この老いばれは聞き入れてくれなかった。再度調査するようにとの一点張りだった。僕は分からなくなった。調査書に何か腹黒い中傷でもあったのか？何故火のないところに煙があがったのだろう。僕は決意した！軍当局が結婚を許可してくれなければ、僕は迷わずに軍官になる道を捨てる。僕の愛情を制限するようなことは、自由を奪うことに等しい。僕の愛する人を奪うことは、命を絶たれるに等しい。このような残虐かつ専制的なところでは、自由が失われれば、もはや僅かな我慢もする必要がない」と、軍当局の卑劣なやり方に憤りを顕わにした。出世コースの軍官を捨てても、婚約者の李雲儒への愛を貫こうとする志が感動的である。

李雲儒に対して一月弱の再調査は当初の評価とがまったく逆の結論が出てきた。「李雲儒さんは康徳6年(1939年)10月1日から同8年(1941年)9月10日まで吉林市公署地政科登録股に勤務していた。行いは正しく、勤勉且つ誠実であり、業務に励み、業績は良好である。性格は温厚で協調性がある。同僚間の友情を妨げることもなく、皆に慕われていた。非常に好評を得ており、人々の模範である。一身上の都合で地政科を辞職されたことはまことに残念でならない。今でも職員たちに愛されている。右、謹んで証明する」とあった。1942年4月13日の日記(317頁)で、李雲儒についての再調査の結果を披露している。同日の日記によると、当初の調査結果は何者かによって事実無根のことを書かれ、まったくの中傷誹謗であることが判明したのだ。国の一軍官の婚姻はもはや個人のプライベートではなく、国家権力機関にコントロールされ、国の基準にあった人のみ、許可されるのは当然のことである。ただし、李雲儒に対する二回に亘る調査はまったく違う内容であり、ときと場合によっては、人の生命、仕途への道、人の人生を剥奪するところだった。一般論になるが、個人の意志の及ばないところで、不当なわけのわからない理由で国家などの公権力に従わせられる。まさに自由意思が剥奪される。この当時は婚姻も例外ではなかった。

五 おわりに

日記全体は政治的な書留が随所にあるものの、婚約者との恋文には時事問題、政治問題、現実への不満、評論などの文言はまったく見当たらない。お互いに相手への配慮と思いやりが考えられる以上に、政治的に厳しい状況だからこそ、デリケートな証拠は残さないことが賢明なのだ。

手紙のやりとりには満洲国内の政治的な戦争の惨さ、民族間の矛盾などがほとんど感じられないが、日本に占領されている辛さを表に出すのを意図的に避ける一方、何か所に無意識に触れた日本人のイメージは読み手にとってはあまり良くない。李雲儒は日本人上司が悪ふざけをされ、体調を悪くしたこと（1942. 2. 12 第2巻 255頁）や婚約写真を撮りに行くときに遭遇した日本婦人（1942. 1. 12 第2巻 210頁）及び結婚願の調査結果を伝達する日本人上官についての描写（1942. 3. 20 第2巻 293頁）はどれも嫌悪の口調を帯びている。民族間の隔たりを痛感する箇所である。しかし、たとえ上官や上司が同じ民族であったとしても起こりうる事実であることも書き添えておきたい。

婚姻届提出後に、李雲儒及び親族に対する本格的な調査が始まり、手紙が開封されることが日記を通じて理解できる。1942年3月27日の日記（第2巻305頁）には、李雲儒からの手紙の一部が載っている。だがその一部分が欠けている。「以上は2頁までの内容である。次は4頁に続く。4頁の端に〈3頁目は一により、送れなくなった〉と李雲儒の自筆で記してある。どのような原因で3頁が送れなくなったのかについて、一のみしかなく、知るよしが無い。敏感な社会環境で施明儒はすぐ、「これが儒妹妹は3頁目の手紙を破棄させられる処分を受けたことを僕に合図している」と理解した。何か時局に都合の悪い文言が検閲に引っかかったに違いない。

二人は様々な障害を乗り越え、1943年4月25日に挙式を挙げた。真の幸せが訪れたのだろうか。今回の検証は二人がつきあい開始後から婚約後の手紙のやりとりに重点を置き、特別な階層（満洲国国軍軍官と政府職員）におかれた若いカップルの恋愛観を見てきた。

日記から二人についての学歴は不明である。しかし、施明儒の日記を見る限りにおいては、漢文体の美辞麗句から文才が溢れている。博学多識の上、

中国古典的な教養が極めて高い。しっかり教育を受けたことが伺える。なお、軍官学校に入るだけの学歴を有することが抜擢された条件の一つだと思われる。同じく市の公署に勤務していた李雲儒も文章に味わいがあり、二、三十年代に女子が教育をほとんど受けられない時代に学問を身につけ、政府要所に務められるのが才媛だと言えよう。

年齢から推定すると、満洲国が建国される前に、二人とも中国の伝統的な教育を受けていたはずである。時代の風潮から見れば、彼らの青年期に中国は民国期に入り、社会が大きな変革が訪れた時であり、書物を通じて西洋的な思想が遠い東北地方に影響を及んでいた。なお、日本の東北における影響力を無視することもできない。満洲国建国後に、その日本経由の影響力が一段と顕著になったと思われる。本を買い集め、読書好きな著者が日記に購入した本のリストをしばしば記録している。1941年8月15日の日記に購入した書物のリストを載せている。『三国志演義』、『国際法綱要』、『憲法と憲政』、『法家政治哲学』、『政治哲学』、『自然科学と現代思潮』、『各国民族性』、『国民政府組織法研究』、『政党論』、『科学的犯罪偵察法』、『朝柳欧蘇集』、魯迅の『阿Q正伝』などで、合計20元以上費やしたという（第二巻 49頁）。他に、日本語原版の書物を購入する記録があった（第2巻 70頁）。読書の趣味と範囲は西洋の哲学、政治、軍事、文学、詩集、法律、中国の古典書物、満洲国内で売られている雑誌などが挙げられており、実に多岐に亘り、多趣味、博学な一面が伺える。これら書物から吸収された教養は手紙のやりとりに現れた恋愛観、人生の見方、理想から見てとれる。

二人は未来志向であり、明るい人生設計をともに語り合い、女性の人格を認めた上での付き合いは進歩的な思想の持ち主だと思われる。彼らは旧伝統の糟粕を気嫌っているにもかかわらず、家父長の手前や世間体の前では、やむを得ず、妥協をせざる得ないところがあった。

なお、二人の婚約や結納を通じて、東北地方の風習を垣間見ることができた。一部の風習は現在なかなか見られなくなっており、貴重な記録である。

今回は表面的な現象のみ見てきた。検証不足の部分は多々ある。例えば、その時代の知識人女性の生き様、満洲国国軍の仕組みと社会との関わりなどは非常に興味深い。満洲国時代の女流作家についての研究は長年にわたり、積み重ねられてきており研究成果も多い。満洲国時代に読まれていた雑誌

『麒麟』を題材にして、拙稿「“満洲国”の通俗文学—雑誌『麒麟』を例として—」(『立命館文学』第598号 2007年2月)で、女流作家の活躍及び彼女たちが描いた女性について触れたことがある(824頁—825頁)。ところが意外にも、目線を民間人の女性に合わせた研究はまだ少ない。これらの問題を今後の課題にしたい。今後は日記を深く読む作業を継続し、上記に触れたいくつかの問題を角度を変えて、研究を進めたい。

日記は1944年の分はまだ散逸したままである。著者の行方は1949年以降は不明になった。前述の東北師範大学の曲曉範教授ら日記編集委員メンバーによる調査では、施明儒は偽満洲国の軍官で、人民の敵とされ、中華人民共和国建国直後の“反革命を鎮圧する運動⁽¹⁰⁾”で銃殺刑に処されたという。ただし、確固たる証拠は乏しい。旧満洲社会の裕福層、政府職員、対日協力者は、共産党政権下で弾圧の対象になっていた。施明儒の家族は同様に処刑されたのか、または世を憚って、行方をくらました可能性があると思われる。今後は更なる研究によって、新たな事実を期待したい。

最後に、満洲国時代の日常を丹念に記し、貴重な日記を残してくれた著者施明儒に感謝し、この小論を彼の御霊前に捧げ、衷心より鎮魂歌を送りたい。

(本学教授)

参考文献：

- 1 『満洲国の習俗』満洲事情案内所 昭和19年
- 2 『鄭孝胥日記』(全五冊 中華書局 1993年)
- 3 『私と満洲国』武藤富男(文藝春秋 1988年)
- 4 筆者は本テキスト『鞞印深深 ある偽満軍官の日記』の編集者の一人である東北師範大学教授曲曉範先生に何回も内容について御教示を賜った。それらの内容は拙論に反映されている。

(10) 中華人民共和国建国後に、1950年代に土地改革が実施された後に、年末から毛沢東は“反革命活動鎮圧”に対する指示を出した。全国では大規模に地主や旧国民党関係者などが弾圧され、処刑された。施明儒はこの運動で処刑されたと見られるが、検証できる資料は見つからない。